

琉球大学学術リポジトリ

[短報] *Opius Fletcheri*
Silvestri (ウリミバエコマユバチ) 石垣島に産す

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 清二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015200

短 報

Opius Fletcheri Silvestri (ウリミ
バエコマユバチ) 石垣島に産す

東 清 二
(琉球農業試験場)

ウリミバエ *Dacus cucurbitae* Coquillett の天敵 *Opius Fletcheri* Silvestri ウリミバエコマユバチは、楚南仁博氏と屋代弘考氏により1932年に200頭、1933年に470頭、1934年に423頭、合計1,093頭が台湾から導入、石垣島に放飼された。その結果同島のウリミバエ被害は減少し、天敵が定着したかのように見られたが、1936年から再びウリミバエの発生が多くなり、冬季の低温が天敵の越冬に悪影響を与えたらしく、天敵の効果を永続させるには毎年導入増殖して放飼する必要があるとのことでその方面の研究が中断されるようになった(屋代, 1940, 応用昆虫2; 屋代, 1934, 昆虫. 8)。戦後高良(1947~1949)により生息の有無調査がなされたが確認するに至らず再調査の必要を力説した(1964, 琉大校外普及叢書第4号)。もともと *Opius* 類は低温に対する抵抗性があり、また石垣島におけるウリミバエ被害が宮古島のそれに比較して少ないように見られていたところからその原因について調査したところ本天敵の定着を確認することが出来た。1965年5月の調査でウリ類圃場から採集したウリミ

バエの終令幼虫462頭から21頭の天敵を、37匹の蛹から6頭の天敵を得た。寄生率はそれぞれ4.5%、16%と低かった。それは1965年の冬が割合低温であったためウリミバエの発生が遅く、しかも発生量も少なかったことによるものと思われる。ところで1963年6月と1965年5月の石垣島および宮古島におけるウリ類のウリミバエによる加害は次の通りであった。

寄主名	加 害 果 率		加 害 果 率	
	石 垣 島	宮 古 島	石 垣 島	宮 古 島
	1963年6月	1965年5月	1963年6月	1965年5月
	%	%	%	%
キウリ	6.7(176)	4.9(305)	17.0(439)	10.0(673)
カボチャ	4.2(134)	3.4(351)	16.0(74)	14.6(104)
ニガウリ	4.4(93)	1.1(132)	21.3(378)	—
ユウガオ	—	—	—	14.0(34)

(注) カッコ内は調査果数

石垣島の加害果率は宮古島のその約半数であり、その原因の一つにその天敵が考えられる。